

---

# Fate of Trick ~ 運命の悪戯 ~

季疑磨 奇羅柚戯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate of Trick ～運命の悪戯～

### 【Nコード】

N7271V

### 【作者名】

季疑磨 奇羅袖戯

### 【あらすじ】

これは、少し変わった「第五次聖杯戦争」のお話。

聖杯の気まぐれによって起こった異変。

それは今と始まりの聖杯戦争が混ざったルールだった。

16組のペアによる派手な殺し合い！？

異世界の魔術師や英霊が多数登場！？

願いを叶えられるのは一組ではない！？

そんな聖杯戦争で聖杯を手にするのは一体誰なのだろうか？

そんなに長い物語にはならないと思います。

厨二成分にご注意下さい。

時折ガ○ダムなどのネタが入ると思います。

ライダー姉さんの活躍を楽しみにしている方には申し訳ない内容だ  
と思います。

異世界の英霊とか言っても全部オリキャラですからね。

偶に絵を描くと思います。

投稿テンポが大分遅いと思います。

何ヶ月も間が空く時もあると思いますが、絶対完結させます。

言いましたからね？これで完結できなかつたら殴つてくれても構い  
ません。

1月～4月は諸事情により投稿できないと思います。

## プロローグ（前書き）

これは素人が「Fate/Stay Night」を元に考えた物語です。

「独自の解釈、オリキャラ、キャラ崩壊、オリジナル設定、グロ表現」が多数存在します。

そういったものが苦手な方は他を当てることを奨めます。  
それでも構わないという方はご自由に観覧ください。

## プロローグ

「聖杯戦争」。手にした者の望みを叶えるという万能の願望機「聖杯」をめぐり、7人の魔術師<sup>マスター</sup>が7人の英霊<sup>サーヴァント</sup>を用いて繰り広げる争奪戦……。のはずだったのだが、うむ、どんなものでも例外はある。それは聖杯戦争とて同じということか。ん？時間か。では本編へ移るとしよう。

### 第五次聖杯戦争2年前

(PM 6:30) 「教会

神父「では今日は外食がいいというのだな？」

この神父は「言峰 綺礼」。悪趣味だが麻婆好きだから許す。

男「そうだ！あんな物を毎日食っていては身が持たんわ！」

この男は「ギルガメッシュ」。前回の聖杯戦争で弓兵として呼び出された英霊だが、聖杯の泥を浴びて受肉している。

言峰「フツ、まさかお前から「身が持たん」という言葉を聞くときが来るとはな。前までの威勢はどうした？そうか、「世界最古の英雄王」であつても麻婆には敵わなかつたということか。」

ギル「馬鹿なことを言うな！王たる我が食べ物ごときに遅れをとるはずがない！ただな、我は王だぞ？なぜ毎日同じ物を食わねばならんのだ？それにな、我はアレを食べ物とは思いたくない！あんな物を食うぐらいなら聖杯の泥を浴びていた方がまだマシだったぞ！」  
言峰「それほどまでに私は料理が下手だと？自分では満足していたのだがな。まあいい。それなら今日は泰山へ行つて麻婆を食べるとしよう。」

ギル「待て待て待て！我は麻婆自体を否定しておるのだ！あんな物、

我はもう絶対に食わん！兎に角だ！我は麻婆以外の物が食べたいのだ！」

言峰「それはそれで納得できないが、まあ、偶には麻婆以外の物を食うのも悪くはないな。では場所を選べ。」

ギル「そうだな・・・では、ファミレスとやらに行こうではないか。雑種共に人気らしいしな。偶には雑種共と同じ物を食うのも悪くはなからう？」

言峰「ファミレスか。フツ、なら新都駅前のファミレスにしよう。」  
そうして二人は新都駅前のファミレスに行くことにしました。

(PM 7:10) 新都駅前

教会を出発しておよそ30分が過ぎ、新都駅前まで来ていた。大体の仕事が終わる時間なのか、この時間はいつも人通りが多い。6割がサラリーマンだろう。残りの4割は若者が多い。特に学生が。つい最近、中学生数名がズタズタの死体で見つかった事件があったというのに、怖いもの知らずだ。

そうして辺りを見回していると一人の老人が視界に止まった。

(PM 7:15) 新都駅前のファミレス

店員「いらっしやいませ。三名様でよろしいでしょうか？」

言峰「ああ」

店員「お客様は喫煙なされますか？」

言峰「いや、しない。」

店員「では禁煙席へご案内いたします。」

そうして三人は結構奥の窓際の席まで案内された。ここはビルの4階で、駅の様子がよく見える。少し下へ目をやると、数え切れないぐらいの人が見える。そんな光景を一瞬見て、言峰はすぐにメニューを見た。

店員「ご注文をお伺いしましょうか？」

言峰「では、麻婆豆腐のエクストラファイアを頼む。」

ギル「我は・・・そうだな、ハンバーグとやらにしよう。」

老人「ワシはクリティカルレインボーパフェを頼もうかの。」

店員「かしこまりました。ではすぐにお持ちいたしますね。」

店員が見えないところまで去って行くと。

言峰「貴方が外出とは珍しいですな。何かあったのですか？」

老人「最近の物に興味を持っただけじゃよ。今日はこのパフェが目当てで来たんじゃ。まあお前さんにも用はあるんじゃがな。」

この老人は「間桐 臓硯」。体は蟲で出来ている人。その体で五百年も生きた初代マキリ当主。蟲が好きとか、ありえんw

言峰「ほう。で、私に用とは？」

臓硯「次の聖杯戦争についてじゃよ。一つは、お前さんも薄々勘付いとると思いが、5年と経たぬ内に起きるじゃろうな。」

言峰「ええ、前回はあまり魔力を消費せずに終わりましたから。」

臓硯「そうじゃ。で、もう一つなんじゃが、これについては自分の目で見た方が良いでしょう。」

言峰「何か目に見える現象でもあるのですか？」

臓硯「違うな。まあ帰ったら蔵か何かでも探してみるといいじゃろ。その中でワシも知らなかった聖杯戦争の事実が分かるじゃろ。」

よ。」

言峰「・・・」

暗い空気が流れていたが、注文したものが来てから少しマシになった。ギルガメッシュがハンバーグに感動したり、言峰が麻婆を樂しそくに食べたり、臓硯が身の丈程あるパフェを3分と経たずに完食したりと見た感じ賑やかな様子だ。そうしてしばらく経って。

臓硯「さて、ワシはそろそろ帰ろうかの。パフェありがとうな。」

そう言って臓硯は店を出た。その姿はどこか満足気で、どこか優しさが感じられた。あれは本当に間桐 臓硯なのだろうか、いや、あれは本来の彼の姿なのだろう。と思ったように見せかけて、少し

腹を立てた言峰。

言峰「そろそろ帰るぞ。」

そうして二人はファミレスを去った。

(PM 8:10) 言峰教会

言峰教会へ着いて、言峰はすぐに地下へ向かった。目的地は地下6階の奥にある蔵。そこに興味がなかったのでこれまで一度も入ったことはない。だが今の言峰はその蔵に興味津々だ。当然の事だろう。なんせあの間桐 臓硯すら知らなかった聖杯戦争の事実が記されているのだから。楽しみになりながら言峰は歩みを進めていった。

(PM 8:25) 言峰教会最深部

迷路のように入り組んだ道を進んで行き、蔵の前まで来た言峰。扉は江戸時代あたりのものと思える。そんな事は考えず、扉を開けた言峰。扉の先には真つ暗な狭い空間が広がっていた。まあ暗いは当然だろうがな。意外にも電灯があつたので言峰はスイッチを押した。蔵の中は四つの小さな電灯で照らされ、蔵のいたる所に本棚があるがどうやら古書一冊しかないようで、言峰はその埃を帯びた古書を手に取り、埃を掃った。「願い叶えし物をめぐる戦い」と書かれているようだ。中を見てみると、注意書きのようなものが書いてあり、ページをめくると、その戦いの過程のような文章が長々と書かれてあつた。言峰は古書を本棚へ戻し微笑を浮かべた。言峰「どういった結果になるか楽しみだな・・・」

そう呟いて蔵から出て行った。

「願い叶えし物をめぐる戦い」

私の父は魔術というものについて熱心に研究していた。この戦いの原因となった「願い叶えし物」も、その研究の内の一つだ。父は「願い叶えし物」の具現方法を調べ、調べた結果分かったのは、英霊と呼ばれる戦士達を呼び出し、殺す事で「願い叶えし物」の器の形が出来上がる。だが、形しか出来ないで、願いを叶えるならもう一度英霊を呼び出し殺さなければならぬらしい。父はこの事を魔術研究家の仲間たちと私に話し、協力するよう頼んだ。父が話したのは私を含め14人。私は半分も集まらないだろうと思っていたが、予想外なことに全員が賛同した。父は英霊を呼び出す方法を皆に教え、それぞれが英霊の召喚に成功した。このまま上手く行くだろうと私も父も思っていた。だがある日、その英霊の一人が私の家に襲って来た。父は私をかばって致命傷を負い、父の英霊と私の英霊で襲ってきた英霊を倒した。父は自分の英霊を私に押し付け息絶えた。そして翌日から、全員が全員を敵視した。緊張状態が何日か続き、ある日突然、一人が英霊を使って村人たちを殺戮をし始めた。そしてそれに続いて一人が英霊と一緒に村人たちを守り、そして一人は地下へ籠もり迫ってくる英霊を撃破し、そして私は特にどうすることもなくただその様子を眺めてるだけだった。前の私なら恐らくは助けに入ったかもしれないが、今はそんな事をするのも愚かしいと思っていた。そしてある日、私は眺めているのも愚かしいと思つたので、いい加減愚かしい奴等を始末することにした。殺戮を楽しんでいたやつを首を刎り取り返り血を浴びて、必死になって村人たちを守っていた奴の目の前で村人を殺して行って最後にそいつの体をスタスタに引き裂いて、地下に籠もってた奴の内臓を燻り出し、父が死んだ後、私は英霊を倒すことなく戦いを終わらせた。この戦

いは私一人が勝ち、英霊たちは全て消滅した。そして「望み叶えし物」の形が完成した。そしてソレは私に語った。

「この形を作ってくれた事に感謝します。お礼と言ってはなんです。が、未来の事を話しましょう。今からずっと先の未来まで今回よりも小規模な戦いが四回起こります。そして三回目では私はこの形を残して消えるでしょう。そして四回目からは違う何かがこの形に宿り、五回目は今回より大規模になります。下手をすれば貴方が望まない事が起こるでしょう。そうならないように気をつけてください。では私はそろそろ眠りにつきます。」

そう言つて「望み叶えし物」は光へ消えた。私が望まない事とは一体何なのか気になった。そんな事は存在しないと思つた。なぜなら私はありとあらゆるものを愚かしく思っているから。だからどうせ冗談でも言つたのだらうと私は思つた。それから私は何一つない村跡で日々を過ごし、やがて自分がやつた事が一番愚かしく感じるようになった。それから毎日殺した奴等が夢に出てきた。怖くてしようがない。こんな気持ちを誰にも感じてほしくない。今になつて分かつた、「私が望まない事」とは一体どういう事なのか。できるなら私自身でどうにか終わらせたい。だけど私も人だ。永く生きる事はできない。だから私は後の世の人々にかけてようと思ひ、この書を書きました。これと呼んだ方、もしこのような戦いが起こっている事に気づいたなら、どうか止めて欲しい。次のページはこの戦いで被害について書いた。それを見て、どれだけ恐ろしい事を理解して欲しい。

死者：4000人

行方不明：300人

火災被害：四国南西部

ノ港  
壊滅被害：粗蛇島、吾虞島、夷慈島、楠島、奇愉島、犀ヶ島、痲樹

これらは全て幕府が外国人が攻めてきたと偽り、真実は幕府にも知られぬまま闇へ消えた。

呼び出された英霊：剣兵、弓兵、槍兵、騎兵、魔術師、狂戦士、暗殺者、指揮官、策士、舞踏家、銃兵、破壊者、爆弾兵、人形兵、異兵

桐

言

（終）

プロローグ

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？

初めての作成で上手く行っただか不安ですが、

これからもがんばって投稿して行きたいと思います。

最後の古書の内容ですが、

- ・ 注意書きは省略しています。
  - ・ 現代語に訳しているという設定です。
  - ・ 壊滅被害に出てきた島や港は全て勝手に考えたものです。
- 最後に出てきた作者名「言 桐」ですが、  
名前は適当に脳内で決めとっちゃってください。  
改行多くてごめんなさいね。

こんな小説ですが、これからもよろしくお願いします。

## 第1話 「現れる者たち」(前書き)

これは素人が「Fate/Stay Night」を元に考えた物語です。

「独自の解釈、オリキャラ、キャラ崩壊、オリジナル設定、グロ表現」が多数存在します。

そういったものが苦手な方は他を当てることを奨めます。  
それでも構わないという方は自由に観覧ください。

## 第1話 「現れる者たち」

ここは世界と世界の間の空間、時間の概念はなく、只の人間では真つ先に存在を否定される場所だ。そんな場所で、赤い髪に黒いコートを着た少年が独り歩いていた。

少年「次はどこの世界だろう、できれば戦わずに済ませたいな、いい加減疲れてきたし。」

少年の名は「ジエド・デイ・ラシイズ」。幼少の頃に世界規模の罪を犯し、「世界を救う」という使命を背負わされ、今まさに世界を救っている最中であり、それと同時に消えた友人を探している。

ジエド「俺はあと何人自分を殺すんだ……。次は話し合いで分かってくる俺ならいいんだが。」

ジエドの使命とは、平行世界から来た何人もの自分を元の世界に帰す、または存在を抹消することである。既にジエドは4人の自分を殺している。

ジエド「お、光が見えてきた。よし、早く行ってまず休もう。」

そう行ってジエドは光へと走って行った。

(PM 7:50) 「学園グラウンド

ここはある学校のグラウンド。ここでは今、赤髪の少年と無数の人の形をしたもの(以下、人形と略 します)が激闘を繰り広げていた。

少年「この学校の警備ってえらくすごい、なっ！普通に死人が出るぜ、まったくよっ！」

冬木市の構造を把握するためにまず学校へ忍び寄ったが、グラウンドに入った瞬間に人形たち(本人 は人形と気づいていない)に襲われ、今まさにその人 形たちと戦っている最中である。

少年「のわ！？刃物投げてくんなよ！殺す気か！」

そんな少年の言葉は人形には通じず、人形たちは次々と刃物を投げた。

少年「人の話聞けよ！あーもう！なんでいきなり襲われるわけ！？まあ、侵入したからだろうけど・・・このままじゃ、埒があかねえな！わるいが殺す気でやらせてもらっぜ！」

そう言いながら少年は右手にナイフを握り、人形たちへと投げつけた。

だが、人形たちはそれをかわし、少年へと襲いかかった。

少年「うわっ！」

人形の攻撃は少年の頬をかすり、少年は勢いで地面へと倒れた。

少年「いつて〜・・・クソッ！頭打つちまったじゃねえかよ！気絶するところだったぜ！この借りは今すぐ返してやるよ！オラッ！」

少年は掛け声とともに人形へ蹴りをかました。

蹴りは見事に人形の腹に直撃し、人形は数メートル上に飛んでいった。

少年「へっ、どうだ。今は結構痛かっただろ？痛い思いをしたくないなら、俺を逃がしてくんねえか？」

少年はそう言いながら立ち上がるうとすると、

突然、地面に何かの魔方陣が現れ、その魔方陣が赤く光った。

少年「おいおい・・・なんだよこれ？まさかこれって罠？もしかして爆発するとか？」

少年は動揺して、そのまま立ち上がるうとすると

少年「うわ！？何だこれ！？呪い？呪いとか大の苦手なんだけど。まさかこの紋章が爆発するとか？」

右手に浮かんだ赤色の模様。少年はますます動揺して、その模様を左手で掻いた。

女「まあそう慌てなさんなって。男前が台無しだよ？あとその模様はいくら掻いても消えないと私は思っけどねえ。」

突如魔方陣の方から女の声が出た。なかなかの美声だ。少年はすぐに声の方を見た。

振り返った先には赤茶色の長髪に、黒と紅を混ぜたような色のコートを身に纏った女がいた。

少年「アンタ誰だよ。もしかして警備員？ やつと言葉が通じる奴が来たか。なあ、こいつ等止めてくれない？ ちょっと怖いんだけど。」

女「あの人形を止めればいいんだね？」

少年「ああ。」

女「倒してもいいのかい？」

少年「は？ いや、知らねえけど、そっちが倒していいんならいいんじゃないねえの？」

女「そうか、なら遠慮なく倒させてもうとしよう。」

そう言っただけで女は懐から拳銃を取り出し、人形たちへと向けた。

銃口を向けられる前に人形たちは一斉に逃げた。

女「逃げることはないだろう。せつかくなんだし暴れたかったんだけどねえ。」

女は残念そうに言いながら銃を懐へ仕舞った。

少年「もう一度聞くけどさ、アンタ一体何者？ 一応この世界では銃刀法違反ってのがあらしいんだけど、銃構えるとか完全にそれに反してるだろ。」

女「そんな都合は知らないね。私が何者か知りたいんならよろこん

で教えてあげるよ。マスター。」

少年「マスター？俺はバーなんて言んでないんだが？」

女「そういう意味じゃないよ。まさか、アンタ聖杯戦争の事知らずに私を呼んだのかい？」

呆れたように女は尋ねた。

少年「聖杯戦争？何それ、この世界もやっぱり戦争とかしてるのか？平和そうだったんだが。」

女「あいたーし。まさか偶然で呼び出されたのかい私は。それにこんな何もしらないガキんちよがマスターだなんて・・・まあ男前だからまだ許せるけどね。」

少年「あいたーしって何だよ。それにガキんちよだと？まあ男前と言った事に免じて許してやるよ。」

女「最後がム力つくけど、まあいい。とりあえず聖杯戦争の説明をするよ。」

少年「あー、ここってのもなんだからさ、士郎の家までの道中で話を聞こう。」

女「ああ、まあいいけど、そいつの家に急ぎの用でもあるのかい？」

少年と女は歩き出した。

少年「急ぎの用というか、俺そこに泊めてもらってるから。」

女「居候か……」

少年「居候だよ……。しょうがねえじゃん。俺だっぴいきなりこの世界に来たんだから。」

女「この世界？あんた異世界の人間なのかい？」

少年「まあな。で、そんなのどうでもいいよ。とりあえず聖杯戦争の話を知りたいんだが。」

女「ああ、聖杯戦争ってのは……」

そうして女は聖杯戦争の事を話した。

少年「俺はあんたのマスターで、あんたはガンナーのサーヴァントで、他のサーヴァントを倒して聖杯を手に入れる。大雑把に言えばそういうことだろ？」

ガンナー「そういうことだね。それにしても、あんたその土郎とやらに私のことをどう説明するんだい？」

少年「そりゃ、全部そのまま説明するに決まってるだろ？」

ガンナー「あんた馬鹿かい？一般人に聖杯戦争の話をしてどうすんのさ？」

少年「いや、一般人ではないと思う。だって士郎は魔術が使えるからな。」

ガンナー「あー、それなら多分大丈夫かもね。魔術師なら聖杯戦争の事知ってそうだし。」

少年「まあ知ってなくてもあいつなら多分分かってくれるしな。」

ガンナー「お人好しだね、あんた。」

少年「そうかもな。」

嬉しそうな顔で少年はそう答えた。

そして、目的地へと着いた。

少年「ここが士郎の家、衛宮邸だ。」

ガンナー「へえ、こりやまたずいぶんと広いねえ。」

少年はインターホンを押した。

少年「士郎ー。俺だー。あと新しい同居人だー。」

少年は迷惑にならない程度に叫び、奥の方から慌てて走ってくる足音が聴こえた。

士郎「レイディ！お前新しい同居人ってどういう・・・」

中から、衛宮 士郎らしき赤髪の少年が出てきた。

士郎は慌てた様子で途中まで言ったが、ガンナーの姿を見て沈黙

した。

レイディ「紹介するぜ、こいつは俺のサーヴァントのガンナーだ。」

ガンナー「ちょ、あんた大胆すぎやしないかい!? 本物の馬鹿かあんな!?」

動揺したガンナーがレイディへと怒鳴った。

レイディ「じゃあどう紹介すればよかつたんだよ。」

ガンナー「知り合いとかそういう感じでいいだろ!?!」

レイディ「あつ、そうか。わるい士郎、ちょっとやり直す。」

士郎「え・・・あ、ああ・・・。」

ツッコむ気すらなくなった士郎はとりあえず門を閉めた。  
そしてレイディはもう一度インターホンを押した。

レイディ「士郎!。俺だ!。あと新しい同居人だ!。」

さっきとまったく同じ事をやったレイディ。

士郎「レイディ!新しい同居人ってどういう・・・。」

士郎もまた同じようにガンナーを見て沈黙した。

レイディ「紹介するぜ、こいつは俺の知り合いのガンナーだ。」

ガンナー「アホだ・・・」

ガンナーは誰にも聴こえないぐらいの小声で呟いた。

士郎「ああ、さっき聞いた。で、どういう事なのか説明してくれないか？」

疲れたように士郎は尋ねた。

レイディ「ああ、長くなるから後で話す。それより腹減ったから飯食いたい。」

そう言いながらレイディは衛宮邸へと入っていった。

士郎「ああ、すぐ作るよ。」

いつの間にか士郎のテンションは元に戻っており、少し急いだ様子でリビングへと向かった。

ガンナー「立ち直り早いねえ・・・」

関心したようにガンナーは呟いた。

士郎「ゆっくりくつろいどいてくれ。」

ガンナー「お言葉に甘えさせてもらつよ。」

ガンナーは居間に案内され、士郎はすぐそばのキッチンへ行き、レイディはテレビの前に座り、ガンナーはテーブルの前に座った。

レイディ「なあ、あんたの真名はなんなんだ？」

楽しそうにテレビを見ていたレイディが尋ねてきた。

ガンナー「知りたいかい？」

レイディ「知りたいから聞いてんだろ。」

ガンナー「そうだろうね。ま、私の事を知ってる奴なんていないから別に言っても構わないか。」

レイディ「物知りな奴なら知ってるかもよ？」

ガンナー「いくら物知りでも異世界の英霊の事は知らないだろ？」

レイディ「まあそうだな。で？あんたは異世界の英霊なのか？」

ガンナー「そうだろうね。聖杯戦争の説明を聞いた時に今から異世界へ送るとか言われたからねえ。」

レイディ「ふーん。で、真名は？」

ガンナー「エルメラルド・アヴィス。」

レイディ「うーん。「戦争を終わらせた英雄」か。」

ガンナー「予想はしてたけどやっぱり知ってたんだね。」

レイディ「予想はしてたってのは、俺が異世界の人間だからか？」

ガンナー「そうだよ。それに、あんたは私の物を持っているからね。だからそれが触媒となつて、その本来の持ち主である私が遙々異世界から呼び出されたんだと思つてるよ。」

レイディ「なるほど。で、あんたの物つてのは？」

ガンナー「その指輪だよ。」

レイディ「ああ、これが、家の宝物庫漁つてたら見つけた。」

ガンナー「宝物庫つて事はあんた金持ちなのかい？」

レイディ「そうだけど、全部妹にやつて、出て行つた。」

ガンナー「私も同じようにするかもねえ、金に溺れたくはないしね。」

士郎「意外だな。俺はあんたは全部自分の物にして使いまくると思つてたよ。」

ガンナー「酷いこと言うねえ、私がそんな人間に見えるのかい？」

士郎「まあ、見えないと言えは嘘になるかな。」

レイディ「見た感じだろ？実際はいい奴だつて。」

士郎「そうだろうな。お前がそんな顔するのは「いい奴」と一緒にいる時ぐらいだしな。」

レイディ「そうか？俺はいつもと変わらないようにしてるんだけど

な。」

ガンナー「自覚がないんだろ？おや？私の分まで用意してくれたのかい？」

士郎が全員の前に料理を盛った皿を置いた。

士郎「当然だろ？」

ガンナー「サーヴァントは食事をしなくても死なないんだけどねえ。」

士郎&レイディ「そうなのか？」

ガンナー「そうなのだ。言っていなかったか？」

レイディ「いや知らないな。」

ガンナー「そうかい。まあ、せつかく作ってもらったんだし、ありがたうとすよ。」

そう言っでガンナーは置かれた料理を口にする。

ガンナー「うん。なかなか美味しいよ。料理上手だねえ。」

士郎「そうか、口に合ったのなら良かったよ。」

レイディ「やっぱり士郎の作るご飯が一番いい。最高だぜ。」

士郎「最初に俺の作った飯を食べた時は泣いてたもんな。」

士郎とレイディが話をしながら食事をしているのをよそに、ガンナーは黙々と食べていると、衛宮邸へ誰かが入ってきたのを察知した。

ガンナー「ん？士郎、二人ほどこちらに向かっているが知り合いか？」

士郎「え？」

誰かが廊下を走ってきて、勢いよく障子を開けた。

女「士郎！今日のご飯は何！それと靴が余分にあっただけど一体誰が来てるの〜？」

このハイテンションな女性は「藤村 大河」。士郎が通う穂群原学園の教師で、士郎の姉的人物。

士郎「今日はハンバーグだ。というか藤ねえ、廊下は走るなって何度も言ってるじゃないか。」

大河「そんな事はいいから早くご飯！」

少女「先輩、すいません遅れてしまって。」

少女の名は「間桐 桜」。士郎の後輩で、ほぼ毎日士郎の家へと来ている。

士郎「桜、心配してたんだぞ？まあ、無事でよかったよ。」

桜の頬が僅かに赤くなった。青春だね〜。

大河「いえーい、ご飯だご飯！」

喜びながら勢いよく座った大河。このテンションの高さは異常だと思っ。

大河「ところで貴女がお客さん？」

大河はガンナーの方へ向いて聞いてきた。

ガンナー「ああ、今日からしばらくここに住まうことになったガンナーだ。よろしく頼む。」

大河「すっごい大人で美人ね。え？住まう？」

レイディ「そう、俺のサーヴァントで、聖杯戦争が終わるまでここに住むことになったんだ。」

大河「サーヴァント？聖杯戦争？なにそれ？新しいイベント？」

士郎「レイディ、そろそろ話してくれないか？」

レイディ「そうだな。そろそろ話そうかな。」

レイディは自分が聞いたこと全てを全員に話した。

レイディ「というわけなんだ。」

士郎「異世界から人が来たぐらいだから、そんな事が起こってもお

かしくはないしな。俺はその話を信じるよ。」

大河「士郎の言う通り。私も信じるわ。」

桜「私も信じます。レイデイさんは嘘をつくような人じゃありませんし。」

レイデイ「ああ、だから皆夜とか気をつけてくれ。」

大河「それにしても学校に忍び込むなんて、大胆なことするわね。でも学校にそんな警備あつたかな？」

ガンナー「言っておくがあればサーヴァントによる攻撃だ。」

レイデイ「え？そんなのか？サーヴァントにしては数が多かったが。」

士郎「レイデイが見たのは普通の人とかだったんだよな？なら、他人を操る能力みたいなのを持つてる奴なんじゃないか？」

ガンナー「恐らくそうだろうね。死んだような顔してたし、糸か何かで操られてるような感じだったし。まるで人形だったね。」

レイデイ「だとしたら、操られてる奴つてもう死んでるのかな。」

ガンナー「その可能性は高いだろう。サーヴァントは人間の生気を吸って魔力に変える事ができるからね。だから生気を吸って魔力を補充した上で、抜け殻になった体を人形のように操る。そいつとしては一石二鳥だろうね。」

士郎「人を殺す事を得だなんてどうかしてる。」

ガンナー「戦争では人を殺す事を得と思うのが当然なのさ。殺せば勝利に近づく。私だって人を殺して自分の人生の勝利を得たさ。もちろん人間の人生としては敗北以外の何者でもないけどね。」

士郎「話し合えば分かってももらえるかも知れないじゃないか。」

レイディ「話し合いで分かってくれるような奴が戦争なんてすると思っつか？」

士郎「・・・」

大河「まあまあ、そんなテンション下げずにさあ。皆楽しくご飯食べようよ。」

と大河が割って入った。

その言葉を聞いて、その場の全員が「そうだな」と何もなかったかの様に食事を続けた。

(PM 7:52) 「寺

ここは木に囲まれた寺。現在ここには、3体のサーヴァントが集っていて、その内の2体が寺の奥で何かをしている。

女A「!？」

水晶玉を覗きながら怪しげに手を動かしている女が、水晶玉に映った光景に驚く。

女B「これは・・・」

水晶玉に手を掲げている女も同じく、水晶玉に映った光景に驚く。

女B「予想外ね。とりあえず人形達を引かせなさい。」

女A「分かりました。」

そう応えて、人形使いは両手を下げると、水晶玉に映ってた人形が一気に消えた。

女B「アレも恐らくイレギュラーのサーヴァントでしょうね。」

女A「どうしてそう思います?」

女B「アレは銃を持っていたでしょう?アーチャーというのも考えられるけど、アーチャーは少し前に召喚されている。となると、イレギュラーの可能性が高いでしょう?」

女A「そうですね。ライダーという可能性も捨て切れませんが、イレギュラー前提で考えた方がよさそうですね。」

女B「まあどちらにしても、私達がすることに変わりはないわ。これまで通りやるわよ。」

女A「はい。キャスター。」

(PM 9:00) 新都センタービル屋上

ここは新都で最も高いビル「センタービル」の屋上。今そこにはジエドとそのサーヴァントがいる。

ジエド「いい景色だ。そうは思わないか？フォーリナ。」

フォーリナ男「どっちにいつてるんだ？」

ジエド「両方だ。」

フォーリナ男「フォーリナって呼ぶのやめてくれないか。別に真名で呼んでくれたっていいだろ？」

ジエド「わかったよ。じゃあ、ヴァン、クリスディ、この景色をどう思う？」

クリスディ「・・・」

ヴァン「こつちの世界は平和だな。俺の世界でいい景色って言うたら、大きな樹だからな。正直今感動してる。」

ジエド「俺の世界でのいい景色は、夜に丘から眺める町だったな。懐かしいな。」

ヴァン「年寄りみたいな事言うんだな。ま、お前も色々あったんだし、仕方ないだろうけどな。」

ジエド「ああ、色々ありすぎて、生前の事が全て懐かしく感じるよ。2年しか経ってないのに、不思議だ・・・。」

ヴァン「若いのに大変だな。で、ここまで来て何をするんだ？」

ジエド「ああ、ここで一夜を過すそうと思ってな。」

ヴァン「金ないのか。」

ジエド「ああ、ない。これまで必要になったことがないからな。」

ヴァン「ずっと野宿か。嫌にならないか？」

ジエド「慣れてるからな。」

ヴァン「そうか。まあ俺らは霊体化できるから、野宿だろうと関係ないんだが。」

ジエド「そっぴやそうだったけか。まあ、どうでもいいんだがな。んじゃ、お休み。」

ヴァン「ああ、お休み。よく寝ろよ。」

そう言うとヴァンは霊体化し、クリスディもペコリとお辞儀をして霊体化した。

そうして長い夜は終わりを告げた。

第1話・終

## 第1話 「現れる者たち」(後書き)

投稿遅れてごめんなさい。

お盆やら劇の本番やらで作業できませんでした。

がんばれば、プロローグの次の日に投稿できたんですけど、  
がんばりませんでした。ごめんなさい。

で、今回はどうでしたでしょうか？

感想とかくれるとありがたいです。

小学生ぐらいの頃、勝手に色々なアニメやゲームの世界に入って暴れるキャラを妄想してました。実はですね、それがジエド君なのです。ん？それがどうしたって？いや、別にどうもしませんよ。それだけですから。

実は、ほかのマスターのキャラ性とかで困ってるんですが、

見た目とか性格とか要望があれば教えてくださるとありがたいです。

文章下手でごめんなさい。実は国語苦手なんです。漢字は好きですけどね。

ちなみに、その内キャラ紹介編とか作りますね。絵とか描けたら描いときます。

ありがとうございました。次回をお楽しみにね。

## 第2話「戦争開始」(前書き)

これは素人が「Fate/Stay Nigh」を元に考えた物語です。

「独自の解釈、オリキャラ、キャラ崩壊、オリジナル設定、グロ表現」が多数存在します。

そういったものが苦手な方は他をあたることを奨めます。それでも構わないという方はご自由にご観覧ください。

## 第2話「戦争開始」

ここは、言わずと知れよう言峰教会。

今、ここには、マスター2・5人とサーヴァント2・5体がいる。6人は仲良く麻婆豆腐を食べている。ということにしておきたい。6人中、2人が口から火のような泡のような物を嘔き、2人は黙々と麻婆を食べ、1人はハフハフ言いながら麻婆を食らい、一人は何か憑り付かれた様に叫びながら麻婆を食らい尽くしている。

ギル「おい、駄犬……。おかしいのは我か？それとも奴等か？」

今にも息絶えそうな様子で、同じく虫の息状態であるランサーのサーヴァントに問いかけるギルガメッシュ。

ランサー「あいつ等がおかしいんだ……。あいつ等は現代人だからこうゆうのに慣れてるんだよ。だからまったく平気なんだ……。きつとそうだ……。」

体を震わせながら、自分に言い聞かせるように話すランサー。

ギル「最近の雑種は味覚が狂っておるのだな……。だが、言峰たちは分かるが、あのボマーのサーヴァント、奴はどうなんだ？さつきから叫んでおるが口が止まっておらんぞ……。バケモノか……？」

ランサー「味覚音痴なんだよ……。多分。きつとそうだ……。」

座に戻る一歩前にいる二人をよそに4人は今も麻婆を食べている。

ボマー「おお！なんと素晴らしい！これこそが最高の爆薬だ！兵器だ！素晴らしいぞっ！美味しい！！」

言ってる事は強ち間違いではないが、並の英霊ならば味が分からないぐらいに辛い物を美味しいと言えるのはおかしい事だ。いや、それ以上に食事中に叫びすぎだ。行儀が悪すぎる。子供か、こんにゃろ。おつとすまない、本音が出てしまったようだ。

言峰「ハフハフ！ハフハフハフハフ！ハフ！」（分かるか！麻婆の素晴らしさが！兔香李、貴様のサーヴァントはなかなかよく分かっているようだ！）

兔香李「ボマー、綺礼さんと意気投合するのはいいけど、食事中にあんまり大きな声を出しちゃダメだよ？近所迷惑でしょ？」

ボマー「……すみません、マスター。あまりの美味さに感動してしまって……。」

兔香李「そう言われると作った甲斐があったわ。バゼットさん、どうです？口に合いますか？」

バゼット「ああ、とても美味しい。兔香李は料理が上手だな。是非ともご教授願いたいものだ。」

兔香李「教えられることなんて何もありませんよ？気分と直感に任せて作ってますから。」

バゼット「気分と直感……今度試してみよう……。」

ギル「なあ、駄犬……奴等は一体何を話しておるのだ……？我

にはよく聞こえんだ……」

ランサー「俺も……よく聞こえないが……、この何百倍の辛さの麻婆を殺意と憎悪で作るとか、言ってるように見えるぜ……。」

ギル「そうか……。我には死神がもつとおぞましい麻婆の作り方を話しているように見える……」

ランサー「聖杯戦争の前に朽ち果てるのか……せめて……ウブオアツ!!!!?」

言葉を途中まで言ってランサーは大量の血を噴き出し、気を失った。

ギル「我を……置いて行くな……我一人ではこ……グツハアツ!!!!?」

同じくギルガメッシュも言葉を途中まで言って大量の血を噴き出して、気を失った。

意識が薄れ行く中に二人は呟いた。

ギル&ランサー「さらばだ……聖杯……。」

side:ジエド・デイ・ラシズ

こじは・・・上に書いてるから説明いらなくね？

居間の真ん中の席で衛宮 士郎が笑顔のまま固まっている。

士郎（あ、いい句が出来た『衛宮邸 今日も増えたよ 居候』ははは・・・）

レイデイ「士郎？おい。起きろー。起きないとその顔に塩酸ぶっかけるぞー。」

ガンナー「塩酸なんて持つてるのかい？」

レイデイ「いや、ない。ただの脅しさ。まあ、熱いお茶ならかけるけど。」

ガンナー「私は何をしても起きないと思うけどねえ。こりゃ終わってたね。」

ジエド「放っておいたら起きるんじゃないか？」

レイデイ「そうだな。しばらくそっとしておくか。」

1、2秒の間が空いて、ガンナーが何かに気付いた様に玄関がある方向へ視線を向けた。

ガンナー「大河、まだ飯は出来てないぞ。」

その言葉を聞いた瞬間に大河と呼ばれる人物がピクリと動いたのが障子越しから見えた。

大河「そーんなあ！士郎は一体何してっ……んのさぁ……」

大声で叫びながら障子を勢いよく開けて、大河と呼ばれる人物は途中から勢いを無くした。

大河「失礼ですが、どちら様で？」

恐る恐る俺達に「当然の質問」をしてきた。俺が答える前にレイデイがいきなり声を出した。

レイデイ「コイツらは今日から居候することになった、俺と同じ聖杯戦争の参加者のジ……」

自分の名前ぐらい自分で名乗っとかないとな。

ジエド「ジエド・デイ・ラシイズだ。こっちは俺のサーヴァントの……」

ヴァン「フォーリナのサーヴァントのヴァン・フロウエんだ。よろしく。」

ヴァンはニコリと笑顔を浮かべ名乗った。

クリスデイ「同じくフォーリナのサーヴァント、クリスデイ・アヴイスです。お世話になります。」

そう言つとクリスデイはペコリと頭を下げた。

大河「どーも、ご丁寧に。私はこの衛宮邸で一番偉い藤村 大河で

「す。三人ともよろしくね!。」

衛宮 士郎はハツと我に返り、大河の方へ向いて。

士郎「藤ねえは驚かないんだな。」

大河「まあ予想してたしね。来週までに此処が宿舎と化してても驚かない自信があるよ。」

笑顔で答える大河に対して士郎は視線を横に逸らして「俺はそうならない事を祈るよ。」と呟いた。

大河「ところでさあ士郎。」

両手でお腹を押さえ、やたらと身体をクネクネと動かしながら、表情が死にかけてる士郎へと何かを求めるように話しかけた。

士郎「何さ……。」

追い打ちをかけられ、死んだ表情からうんざりとした表情へ変わりどうでもよさげに言葉を返す士郎

大河「ご飯まだ?」

その一言にその場の全員(サーヴァント以外)が「あ……。」と声を漏らした。

(PM 4:00)???)

ここはアメリカに建つ4階建ての屋敷。この屋敷は作られてまだ1ヶ月しか経っておらず、壁や天井などのいたる所が新しい感じである。

そんな屋敷に住んでいるのは女性一人で、この広い屋敷は一人で住むには広過ぎて、空き部屋も相当な数ある。

その空き部屋の内の一つに、屋敷の住人である女性「ルーシー・エルメリア」が床に水銀で魔法陣を描いている。

陣を書き終えたのか、手を止め、「ふう……」と一息つくところの中へと入り、詠唱を始めた。

ルーシー「礎に銀と鉛。祖には我が先祖エルマーバーム降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

「！」

詠唱を終えると、陣が赤く光り、陣の外にも人一人が入りそうな大きさの陣が一つ現れ、その陣の中から人が出てきた。

「???」問う、我を召喚した者は・・・貴殿で間違いないな？」

陣の中から現れた人物がルーシーへ問いかけてきた。

ルーシーはあつけにとられた。本当に英霊が現れた事に。魔術師として半人前である自分が英霊を召喚できたという事に。

ルーシー「ええ、私で間違いありません。ところで、貴方のクラスを教えて貰えますか？」

「???」我は策士スキーマーのサーヴァントだ。問わずとも我のステータスぐらい分かるだろう?」

ルーシー「私は魔術にあまり詳しくないので。召喚も好奇心でやっただけであり、本当に英霊が出てくるとは思ってませんでした。なので正直なところ、用意や勉強などはあまりしていません。」

スキーマー「そうか・・・。ならば早く魔術について学ぶべきだな。魔術もロクに使えんようであればこの戦い、命を落とすだけだぞ?」

ルーシー「・・・では、後で学ぶとしましょう。あまり時間はかけられません・・・。」

スキーマー「急ぎの用でもあるのか?」

ルーシー「ええまあ、サーヴァントを召喚してしまった以上、聖杯戦争へ向けて色々と準備をしておいた方がよさそうなので。」

スキーマー「ふむ、何事にも準備は大切だからな。なら、早く済ませろ。」

ルーシー「いくつか聞きたい事があるのですが……。」

スキーマー「問いには答えるぞ。マスターよ。」

ルーシー「では聞きますが、貴方はスキーマー、つまり策士という訳ですが、これまでどのような策を用いたかを聞かせて貰えませんか？」

トランクに銃や魔術に関する本などを入れながら、スキーマーへと問いかけた。

スキーマー「ほう。これは意外な質問だ。中々頼りになりそうだなで、『どんな策を用いたか』か、そうだな、一番よく使ったのは奇襲だったかな。戦略の基本だしな。これは聖杯戦争でも役に立ちそうだな。」

ルーシー「奇襲ですか。……やはりアサシンには注意しておきましようか。他には？」

『奇襲』という単語を聞き、ふと他のクラスを思い出し、改めてアサシンのサーヴァントへの警戒を強め、他の策を問う。

スキーマー「他か……。」

それからしばらく話は続き、二人は聖杯戦争で使える戦術をいく

つか決めていった。

(PM 8:30) 深山町

side: 衛宮 士郎

今俺は深山町にいる。藤ねえが帰ってからレイディにパシラされた。レモンティーが飲みたいらしく、ジエドからもレモンティーを頼まれた。だから仕方なく今、学校近くの自動販売機へと向かっている最中なんだ。自分で行けって言ったら「マジな話、どこにあるか分からない」と言われた。今度の日曜にでも二人に冬木を案内してやるか。

とかなんとか考えてたら、自動販売機が見えてきた。結構距離あるんだな、と改めて思ったよ。

士郎「さて、早く買って早く持って行ってやるか。」

自動販売機まであと4歩ぐらいという所で俺は異変に気付いた。

さつきから鉄と鉄をぶつけたような音がしていたんだ。

それが自動販売機に近づく度に、その音は大きくなって来る。

そして俺は、どこから音が聞こえてくるのか分かった。

士郎(学校からか?なんでこんな時間に……。そういえばレイディとガンナーが学校でサーヴァントに襲われたとか言ってたな……)

俺は気にしないようにしようかと思った。

だが、もしも誰かが襲われてたりしたらと思うと、とても無視はできなかった。

俺の足は動き出した、速く、速く。学校を目指して……。そして目の当りにした。双剣を振るい赤い外套を身に纏った男と、

紅い槍を振り回す青い全身タイトの男が戦っていた。いや、殺し合っている様に見える。

しばらくボーっとしてた。そしてハツとなった時、槍男がこちらを向いた。

そしてニイツと笑い俺の方へ走ってきた。

士郎（ヤバイ！殺される・・・！）

死にたくないと思っていた。そう思っていたら、俺の体は勝手に動いていた。

逃げた。走って逃げた。どこへ向かっているのか自分でも分からないまま走った。

そして気が付くと俺は、自動販売機にもたれかかりながら座っていた。

この自動販売機はさっき見た自動販売機だ。本来の目的地だった自動販売機だ。

学校に行かなければこんなことにはならなかったのに、と自分を責めた。

そんな無駄な事をしていると、前に誰かが立っていることに気が付いた。

まさか、と思いながら俺は顔を上げようとしたその瞬間、

男「よお」

声をかけられた。そしてそれで誰が立っているかが分かった。

槍男だ。間違いない。俺を襲ってきた時のあの顔は今のような声を出しそうな顔だった。ちょっと格好良い顔だった。でも極悪非道な顔だった。

時間の経ちが遅くなったように感じた。

そういえば、人間ってというのは生命の危機に陥ると、脳内に普段

以上のアドレナリンが分泌されて、まわりがスローモーションのように見えるらしい。俺は今そんな状態だと思います。以上！

士郎（なんてスローモーションなんだ……。これじゃもしかしたら逃げられるかも……。あ、駄目だ。動かない……。すごい酷い状況だよ……。死にたくない！爺さんに助けてもらったこの命を……）

男「死んでくれよッ！」

男はそう言っただけで俺の心臓めがけて槍を刺した。

叫ぶ暇も、助けを呼ぶ暇も、命乞いをする暇もなく、俺の左胸は紅い槍に貫かれた。

そして気が付くと俺は、自動販売機の前で横たわっていた。

士郎（床が冷たい……）

コンクリートの冷たさを感じながら、違和感を感じた。

士郎（あれ？俺さっき心臓刺されたよな？なんでまだ生きてるんだ？それに全然痛くも苦しくもないし。）

左胸を手で触り、身体に何一つ傷が無い事に気付いた。

士郎（あれ？おかしいな？服には穴が開いてるのに、身体は何ともないぞ？というかもしかしてここは死後の世界だったり？それとも俺が幽霊になってるのかな？）

「変だ変だ」と頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

士郎「まあ、とりあえず家に戻ってみよう。あるかどうか分からないけど……。」

「よっこいしょ」と立ち上がると、服から何かが落ちた。見てみると落ちたのは先に紅い宝石が付いたペンダントだった。

士郎「何だコレ？こんなの持ってたっけ？」

思い出そうとしたが、とりあえず「舞弥。」と言って、後で考える事にした。

で、来た道に戻って家に着いた訳だが、よかった。衛宮邸はあるみたいだ。

そしてインターホンを押した。けどいくら待っても誰も出てこなかった。

士郎「またどつかいったのか？」

レイディはよく勝手に出かける。ガンナーを連れて来たあの日も俺が買い物に行ってる間に勝手に出かけたんだ。

誰も出てこないという事はジェドも連れて行ったんだろう。

まああれやそれは俺が生きてたらの話だけだな。

とりあえず、鍵はちゃんと持って来てたし、扉を開けることにした。扉が開いた。それと同時に、爆発音のようなものがした。

士郎「倉庫の方だ！」

その音が自分がいつも使っている倉庫の方からした事に気づいて、倉庫へ走って行った。

倉庫に近づくにつれてついさっき聞いたような音が聞こえてきた。そう、鉄同士がぶつかり合うような音だ。

鳥肌が立った。足が上手く動かなくなってきた。怖くなってきた。そして俺は一旦足を止めた。

身体が震えていた。身体が動こうとしない。

そうやって立ち止まっていたら屋敷の角から何かが真横に飛んだ。

飛んだ物体は壁にぶつかった。『ドラゴポール』とかでよくある、勢いよく飛ばされた人物が壁に激突して表面に大穴を開ける感じだ。

砂煙が辺りに広がった。

やがて砂煙が晴れて行き、動かなかった俺の身体は自然と飛ばされた物体の方へと走っていった。

士郎「ジエド！どうしたんだよ！おい！」

飛ばされたのはジエドだった。

ジエドの身体はボロボロで、いたる所から血が出ている。それでもジエドは平気と言わんばかりに立ち上がった。

ジエド「士郎か、グッ……、逃げる。サーヴァントだ。」

士郎「お前を置いていけるかよ！」

つい言ってしまった。俺には他人を庇ってしまう癖がある。でも今まで他人を庇って後悔した事はない。俺は全ての人を幸せにした。だから、誰かの不幸は見逃せない。

正直、ジエドでも勝てない相手に俺が勝てる訳がない。

さっき（出かける前）俺はジエドと腕相撲をして惨敗した。5戦5

敗で開始早々決着が着いた。凄い勢いで何度も打ちつけられた所為でずつと右腕が痛い。死んだと思った時から痛くないけど。まあ、とにかく俺には難しい事だ。

だけど、どうにかしなくちゃいけない。俺がやらなきゃ誰がやる？今は俺以外誰も・・・あれ？レイディはともかく、ヴァンやクリスディはどこ行っただんだ？

サーヴァントはマスターからの魔力供給があつて現界しており、魔力の供給が断たれるとサーヴァントは消滅してしまうらしく、だからサーヴァントはマスターを守りながら戦うとガンナーが言っていたが、今マスターのジエドが危機に曝されているが、二人が現れる様子はない。

士郎（いやというか、何でこんなに考える時間があるんだ？）

辺りにはまだ砂煙が舞っているが、ジエドが飛ばされてから20秒は経っている。なのにまったく誰も来る様子はないし、何か起きてきている様子もない。

士郎（逃げた？）

さっきのでジエドが死んだと思ったのか？それとも何か事情があって・・・そういや今日の『渡る世間は正真正銘の鬼ばかりなんだがどうしてくれる』は500話記念で海外旅行編を放送されるんだつた。9時からだったな。もしかしてそれを見に行ったとか・・・いや、それはないな。

そんなことを考えていると、ジエドが飛んできた方向から物音が聞こえてきた。鉄同士が（ry

士郎（いる！なら戦っているのはヴァン達か？）

俺はどうすればいい？平気そうなジエドを安全な場所まで運ぶか？それともあっちへ加勢するか？

今のところ敵がこっちへ来る様子はない。ならジエドをここに残しても、屋敷へ入らせてもいいと思う。けど、ジエドなら「大丈夫だ。」とか言ってる戦いそうなんだよな。ん？まてよ。なら安全な所へ運んでも一緒の事なんじゃないのか？それならジエドを守りながら戦う方がいいよな……。まあ俺がジエドを守るというのもどうかと思うけど。迷っている時間はない。ええい！

士郎「ジエド、お前はここで休んでろ。俺が行く。」

ジエド「だが……」

士郎「言いたい事は分かる！俺じゃ足手まといになるだけかもしれない。けど俺は、誰かが傷つくのは嫌なんだ！頼む！ここで待っていてくれ！」

ジエド「……分かった。だが、危なくなったら加勢するからな。」

士郎「ああ。」

以外にも簡単に承諾してくれた。実はもう少し粘るかと思っていた。……って今はそんな事どうでもいい。早くあっちへ行かないと。

俺は僅かな砂煙の中を駆け抜けた。

そして前を見ると、案の定ヴァンとクリスデイが戦っていた。相手は……

士郎「槍男ッ！」

特に驚く事ではなかった。そういう気がしなかったわけではない。

そんな事より俺はマズイ事をしてしまったかもしれない。

槍男がギロリとこちらを睨んだ。ヤバイ。目をつけられた。

いやまあ、戦うと決めた瞬間から決死の覚悟はしていたし、逃げるわけにはいかないし、逃げるつもりもないんだが。マズイのは立ち位置だ。

俺の後ろにはジェドがいて、俺の位置から垂直線上に槍男とヴァン達がいる感じだが、俺の位置は槍男に結構近い。俺が大股で10歩ぐらい歩いて槍男の位置までいけるとすれば、ヴァン達の位置へは15歩は必要だろう。

士郎（って何考えているんだ俺は！助けてもらおう事しか考えてないじゃないか。）

自分の身は自分で守る。それはこの場では最も大事な事だと思う。なのに俺は他人に甘えている。必ず誰かが守ってくれると思っているんだ。さっきみたいに奇跡が起こると思っているんだ。

士郎（ダメだ。思考をリセットしろ。今は自分を責めてる場合じゃない。生き残る方法を考えるんだ。何かあるはずだ。）

考えていると槍男がこっちへ走ってきた。槍をこっちへ向けながら、突撃するように。

俺は精一杯の力で左へ跳んだ。

見事に槍は外れた。だが、槍男はそのまま槍を俺の方へ振り払った。

俺は咄嗟に手元に落ちていた筭を手に取り、強化魔術をかけて防いだ。

俺は筭と一緒に飛ばされた。

飛ばされてすぐに俺は立ち上がって蔵の方へ走った。蔵にはバー

ルやスパナなどの武器になりそうなものがたくさんある。元が脆い筈を強化するより、元が強固な工具を強化する方が強化結果はいい。今は強力な武器が必要だ。

必死で走った。全力で走った。蔵までもう少しだ。だがそこで、槍男に追いつかれた。

槍男「逃げれるとでも思ったのか？簡単に逃がしてやる程俺も…甘くはねえッ！！」

言葉と同時に飛んできたのは蹴りだった。その蹴りは俺の腹に直撃した。

そして俺は蔵の中へ飛ばされた。

蔵に入るといふ事は、自分の出口を塞ぐといふ事に繋がるが、代わりにそこそこ強力な武器を手に入れられるといふ事。高いリスクを払った割には得られるものは少ないが、それでも何もできずに殺されるよりはマシだ。

だが、今の状況はマズイ。蔵へ飛ばされたのはいいが、飛ばされた位置が悪い。

蔵の扉付近や奥なら工具も結構置いてある。だが、俺が今いる所は蔵の中央だ。中央には何も置いていない。それに明かりをつけていないから、蔵の中は真っ暗だ。唯一の明かりは窓や扉から差し込む月明かりだけ。周りがよく見えない。工具がある所まで走ろうとしても柱や壁にぶつかるだろう。だが…迷っては行けない。一か八か、己の感覚と記憶を信じて、俺は走り出した。

士郎（窓があそこなら、あと2歩先辺りに柱があるだろう。壁へは右の方が障害物が少なかったはずだ。なら右折。次はあと1歩で壁だろう。だがそこには何もなかったはずだ。壁に沿って部屋の奥へ行く。ここで左折。よし、あと少しだ。）

普段よく使っている所が故に柱や地形などは覚えている。もつとも明かりがなければ自分の位置も分からない。正直月明かりだけではキツイが、それでも俺は感覚と記憶を頼りに走る。そして何かが足に当たった。それはなかなか重みのある物で、俺は躓いた。うつ伏せの状態のままその重い物を手にしようとした瞬間。

地面が赤く光った。

起き上がって辺りを見てみると、俺を中心に何かの陣が広がっていた。

どこから来ているのか分からない風が俺の肌を打つ。

俺は啞然とした。

後ろにある窓の方に女性が立っていた。

その女性は体のいたる所に鎧を纏いつている。

その顔立ちは美しくも勇敢で、髪は金色で西洋人に見える。

あまりの美しさに見惚れていると、不意に聴いた事もない声が聞こえた。

女性「サーヴァント剣士<sup>セイバー</sup>、召喚に応じ参じた。問おう。貴方が、私のマスターか？」

士郎「・・・え？」

士郎（マスターと言えば、レイディやジエドのように聖杯戦争に参加する魔術師で、サーヴァントを使役する存在のことを言うが。どうやらこの女性は俺を自分のマスターだと思っているらしい。だが、俺がマスターだという証拠はない。俺が重い物を手にしようとして出てきたとしても・・・）

ふと、右手の甲が光っている事に気づき、見てみると、訳の分からない赤色の紋章が浮かんでいた。

確かこれは令呪とかいう、自分のサーヴァントを抑止、命令でき

る唯一の手段で、マスターである証拠だったな。

え？これが俺の手にあるってことは、俺はマスターって事？じゃあ、この女性のマスターは俺で、俺のサーヴァントはこの女性？

士郎「あ、ああ、多分……。」

そう答えると、女性は蔵の扉の方へ向いた。

槍男「へッ、まさかサーヴァントを召喚しやがるとはな。だが、俺としちゃ嬉しい限りだぜ。ちょうどガキや雑魚サーヴァントが相手に退屈してた所だ。テメエは俺を楽しませてくれんだろうな？」

そう言うつと槍男は槍を構えた。

そして女性は、何かを構える様にして、槍男へ向かって突っ込んだ。

槍男の槍が女性の前で火花を散らして止まった。  
まるで何かにぶつかったようだった。

槍男「チッ！見えねー！剣つてか。厄介だな。だが……。」

そう言うつと槍男は蔵の外まで下がった。

それを追うように女性も外へ出た。

そして俺も外へ出た。

槍男「へっ、まんまと誘き出されやがって。そんなにやられたきや、  
やってやるよ！行くぜえ！『刺し穿つ死棘の槍』<sup>ゲイ・ボルグ</sup>！！！！」

槍男が何かを叫んだ途端、槍が紅く光った。

それを女性の足元の近くへ突き刺した。…ように見えた。  
どういふ訳か槍は女性の心臓へと向かっていった。

女性は少し驚いたようだったが、直ぐにそれをかわした。

槍男「何！？ゲイ・ボルグを避けただと！？」

槍男が何か驚いている。

いや、確かにさっきの槍の軌道は凄かったし、予測不能だったけど。それだけであんなに驚くか？あ、もしかして槍男って、漫画とかで出てくる三下の親分的な立ち位置？自慢げに必殺技繰り出して避けられると激しく驚いてやられるって感じの……。

槍男「！？新手か！」

士郎（また驚いてる。というか、え？新手？）

気になって辺りを見渡したが、誰もいなかった。

と思つたら、いきなり銃声が聞こえた。

蔵の近くの柵辺りからだ。

見てみると、柵の上に二つの影があった。

一つは長い髪を靡かせ、銃を構えている。

もう一つは短い髪を靡かせ、こっちに向かって手を振っている。

レイディ「おーい！士郎ー！だーいじょーぶかー？」

レイディとガンナーだ。

「大丈夫だ」と言おうと思つたらいきなり銃声が出た。

ガンナーが槍男に向かって銃を連射している。

槍男はそれをすべて避けた。

弾がなくなつたのか持っていた銃を投げ捨て新たに銃を取り出した。

ガンナー「『殺戮する軍潰し（レイダーベイ・キラレット）』！  
」

そう叫ぶと、真つ紅に燃えた弾が発射された。

その弾の弾速は遅く、目で追えるぐらいに遅かった。

槍男「へッ、こんな鈍い弾、避けるまでもねえぜ。」

槍男はそう言っただけでガンナーの方へ跳んだ。

そして槍男と弾丸が擦れ違った。

だが、弾はさつきとは比べ物にならないぐらいに超スピードで槍男の方へ向って飛んだ。

槍男「な！？チイツ！追尾式って訳か。はめられたぜ！」

驚きながらも槍男は弾丸を弾き飛ばした。

だが、弾丸はさつきよりも速いスピードで槍男の方へ飛んだ。

ガンナー「何をやるのが無駄だよ。その弾はアンタを追いかける。衝撃が加われば加わる程に加速してね。」

レイディ（説明は負けフラグだと思っただけだなあ・・・）

レイディが悩んだ様な表情になったけど、そこは気にしないでおこう。

ガンナー「アンタの次のセリフはこうだ「わざわざ説明してくれた事に感謝するぜ。」」

槍男「わざわざ説明してくれた事に感謝するぜ。はっ！」

今の話に何か意味があったのだろうか……。

士郎（俺はどうしよう。ジエドも、ヴァンやクリスデイも、女性も皆あつちを見てる訳だが、誰も何も言わないし、何もしないし、誰か何かアクションを起こしてくれないかな。）

とか、色々考えていると、ジエドの近くの柵の上から二人ほど飛んできた。

一人はさつきグラウンドで見た赤い外套の男で、もう一人はその男にお姫様抱っこされていてよく見えないが、どうやら女子の様だ。ってというか、何人くるんだよ。パーティーでもやる気か？

女性「！マスター。新手です。気をつけてください。」

士郎「ああ、知ってる。気をつけるよ。」

ていうか気付かなかったのか。

男は地面に着地すると、丁寧に女子を降ろした。

降ろしてもらった女子は何やらこっちへ歩いてくる。走ってくればいいのに。

そんな事が起こっている間に、槍男とガンナーはまだ戦っていた。

槍男「げっ、赤弓。てか人数多いな。さすがにこれだけの数が相手じゃキツイな。やることはやったし、撤退するとすつか。」

そう言つて槍男は帰つて言った。

いつの間にか槍男を追っていた弾丸も消えていた。

そんな事は気にも留めない様子で女子はこっちへ歩いてくる。

何やら険しい顔だ。もしかしてビンタされるとか？そりゃないよね。

ん？よくよく見ると、知っている顔だな。

確か「遠坂 凜」。男女問わず学校中の誰もが好意を抱いているとされる女子。見た目も性格も頭脳も、全てが優れているらしい。正直俺も彼女に好意を抱いている。

で、その遠坂さんが俺に何の用なんだろう。っていうか彼女もマスターか！

てことはまさか俺を殺しに来たとか？

色々考えてると、彼女は俺の前で立ち止まっていた。

何をされるのかと警戒している俺の手を掴んで、

遠坂「衛宮君！同盟を結びましょう！」

予想外だった。手を掴まれた時は骨を折られるかと思ったが、いや、それより彼女は同盟を結ぼうと言ったな。どうしよう、というか結んでおくにこしたことはないよな。

士郎「あ、ああ、俺は別に構わないけど。レイディ達はどう思う？」

いつの間にかジエドやレイディも俺の周りに集まっていた。

レイディ「士郎がいいなら俺は別に構わないけど。ていうか決定権俺にないしな。」

軽く言われた。まあレイディだから仕方ないということだ。

ジエド「俺も一向に構わない。味方は多いに越したことはないさ。」  
クールに言われた。ジエドはいつもクールだな。

という訳で、一応マスター勢からの承諾は受けたが、サーヴァント勢はどう答えるか。

ヴァン「味方が増えるのはありがたいことだ。だがその分結末は悲しい事になる。ま、俺も全然構わんさ。俺やクリスディだけじゃサーヴァントは倒せそうにないしな。」

少し気になる点があったが、承諾してくれた。

クリスディ「同意」

必要最低限の文字数で承諾。やはり無口だな。

ガンナー「私も全然構わないよ。マスターが言っただしね。」

ガンナーもレイディに誠実な意見で承諾。さて残るは俺のサーヴァントなんだが、

セイバー「私は納得いきません。いきなり現れておいて第一声が「同盟を結ぼう」というのはおかしいでしょう！」

士郎「ま、まあ、そうなんだが。」

俺が反論できずにいると。

遠坂「家事なら任せて！私のアーチャーは炊事、洗濯、家事の事ならなんでも得意よ。それに中華の腕は超一流。味は保証するわ！」

何を言い出すんだコイツは。家事は間に合って・・・いや、間に合っていないな。ならば非とも欲しいものだが、だからといってサーヴァントの特技を自慢したって釣られないだろう。普通。それに、ここまで用心深い奴だ。そう簡単に食いつく訳がない。

セイバー「前言撤回です。あなた達を信用します。信頼できる相手が同盟を結ぼうと言っているのです。承諾するに越したことはありません、マスター。」

はあ？え、何？もしかしてあの文章の中に信頼できる内容でもあったのか？ないだろう。全然。俺からしたらちよつとはあるけど、アンタからすれば皆無でしょうが。一体コイツは何に釣られた！？

士郎「ま、まあ、これで全員承諾という訳だ。よろしくな、遠坂。」

遠坂「え、ええ。こちらこそ。（もしかして今ので釣れたの？何で？釣った自分でも分からないわ。秋刀魚を釣ろうとしたけど秋刀魚のエサがないから駄目元で消しゴムで釣ってみたらホントに釣れてしまった。ってぐらいショッキングだわ。）」

士郎「で、どうするんだ。これから俺達。」

遠坂「衛宮君。あなた、聖杯戦争の事はどれくらい知ってる？」

士郎「まあ、多分全部。」

遠坂「そう。じゃあいいわ。疲れたし私は帰るわね。明日の昼休み、屋上に来てね。」

士郎「ああ。覚えておくよ。途中まで送ろうか？」

遠坂「門まででいいわよ。」

士郎「そうか。」

そして俺達は玄関まで歩いた。

レイディとガンナーは何故かついてきた。フリーダムだよなあ、レイディは。

ジエド達は居間の方へと入って行った。あの身体だし当然だ。もしついてきたら戻れと言ってるどころだ。

レイディ「なあ、何で全身鎧じゃないんだ？」

セイバー「騎士というものは着飾りも大事なのです。これは美しく魅せると同時に、最低限の鎧にして軽量化し身動きを取りやすくするという事でこういう格好になりました。」

レイディ「へ、色々あるもんだな、騎士道も。」

何やら後ろで何らかの話が繰り広げられている。それに比べてこっちはまったくの無言だ。こういう空気って苦手なんだよな。気まぐずいし。

そうこう考えてると門の前まで着いた。今になってよくわかった。家は広いな。

士郎「じゃあ明日な。気をつけて帰るんだぞ。」

遠坂「ええ、衛宮君も気をつけてね。」

家の前だというのに気をつける必要があるのかという話だが、おそらくあるんだろう。

槍男が戻って来ないとも限らないし。

士郎「あ、なんか疲れたな。少し眠たい。」

レイディ「俺も眠い。散歩してたら疲れたぜ。」

レイディの疲労と俺の疲労じゃ大分差があるだろうな。俺は気持ち的にも、肉体的にも大分疲れてるんだからな。

(PM 11:00) 言峰教会・祭壇

Side: 言峰 綺礼

ここは我が言峰教会の祭壇だ。今この場に居るのは私一人。

他の者は自分の部屋で寛いでいる。

一時間程前に、ランサーを戦わせに行くように命じるとバゼットに頼んだ。

詳細としては、「全てのサーヴァントと戦え、だが倒すな。一度目の相手からは必ず生還しろ」と令呪を一画使わせた。

それからしばらく経つ。三時間は経っているな。

そう思っていると誰かが教会へ入ってきた。

入ってきたそれはこちらへ向かっている様だ。

それが誰かは分かっている。

言峰「報告しろ、ランサー。」

その人物はランサー。私の友、バゼット・フラガ・マクレミッツのサーヴァントだ。

ランサー「セイバーが召喚された。それと厄介な事に、セイバーとガンナーとフォーリナは同盟関係にあるみたいだぜ。多分だが、アーチャーもだ。」

言峰「フツ、そうか。これで全てのサーヴァントが召喚されたとい

うことか。」

言峰「聖杯戦争・・・開始。」

人生が始まった。

そして夜は終わりを告げ、衛宮 士郎の新たな

## 第2話「戦争開始」(後書き)

投稿遅れてごめんなさい。

理由は活動報告に書いてます。

いやー、本当は絵も入れたかったんですけど、時間がなくて・・・

ブログであれだけクリスマス投稿って言ったのに完成したのはついさっきですよ？

実はマイクロオフィスが壊れたのは塩酸辺りです。

もうキャラ設定作っちゃいました。

それとオリジナル設定も作りました。

次は冬休み中に投稿できればしますが、できなければ、少なくとも4月までは空くを思います。なぜかって？

三学期は真面目に勉強してみようと決めたからですよ。

という訳で、ご飯もまだ作ってないのでそろそろ終わります。

こんなつまらん物語ですが、これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7271v/>

---

Fate of Trick ~ 運命の悪戯 ~

2011年12月25日23時54分発行